



SMTP サーバを使用した受信者の検証

この章は、次の項で構成されています。

- [SMTP コールアヘッド受信者検証の概要 \(1 ページ\)](#)
- [SMTP コールアヘッド受信者検証のワークフロー \(1 ページ\)](#)
- [外部 SMTP サーバを使用した受信者の検証方法 \(3 ページ\)](#)
- [リスナーでの SMTP サーバ経由の着信メール検証のイネーブル化 \(7 ページ\)](#)
- [LDAP ルーティングクエリの構成 \(8 ページ\)](#)
- [SMTP コールアヘッドクエリのルーティング \(9 ページ\)](#)
- [特定のユーザまたはグループの SMTP コールアヘッド検証のバイパス \(9 ページ\)](#)

SMTP コールアヘッド受信者検証の概要

SMTP コールアヘッド受信者検証機能では、受信者宛ての着信メールを受け入れる前に、外部 SMTP サーバにクエリを実行します。LDAP 承認または Recipient Access Table (RAT; 受信者アクセステーブル) を使用できない場合、受信者を検証するためにこの機能を使用します。たとえば、それぞれ別のドメインを使用する多数のメールボックスのメールをホストしていて、LDAP インフラストラクチャが各受信者を検証するために LDAP サーバにクエリーすることを許可していないとします。この場合、アプライアンスが SMTP サーバにクエリーを実行して、SMTP 通信を続ける前に受信者を検証できます。

SMTP コールアヘッド受信者検証を使用して、無効な受信者宛てのメッセージの処理を減らします。通常、無効な受信者宛てのメッセージは、ドロップする前にワークキューを通して処理します。代わりに、電子メールパイプラインの着信および受信部分で追加処理を行わずに無効なメッセージをドロップまたはバウンスできます。

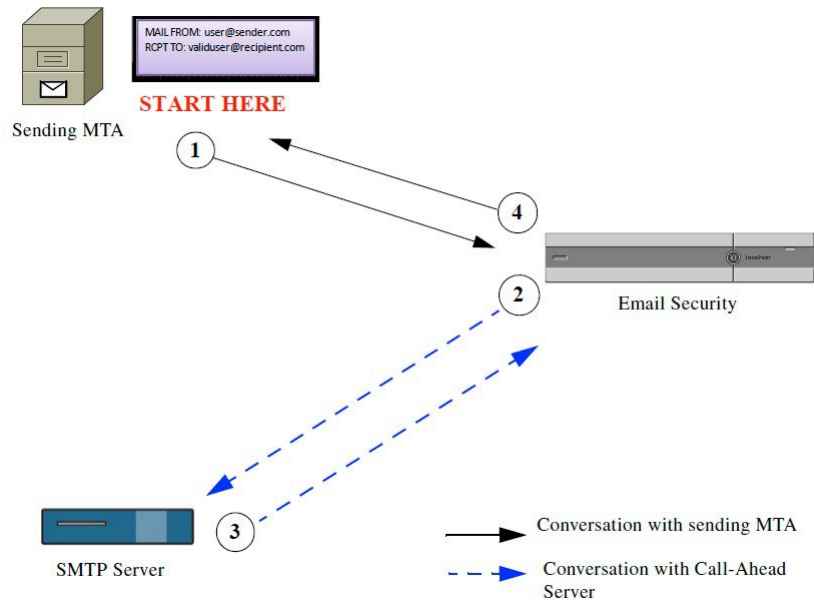
SMTP コールアヘッド受信者検証のワークフロー

アプライアンスで SMTP コールアヘッド受信者検証を設定すると、アプライアンスは、SMTP サーバに「事前に電話して」受信者を検証する間、送信側の MTA との SMTP 通信を中断します。アプライアンスは、SMTP サーバにクエリーを実行するとき、SMTP サーバの応答を E

メールセキュリティ アプライアンスに返し、ユーザの設定に基づいて、メールを受け入れるか、コードとカスタム応答で接続をドロップすることができます。

次の図に、SMTP コール Ahead 検証通信の基本的なワークフローを示します。

図 1: SMTP コール Ahead サーバ通信のワークフロー



1. 送信側の MTA が SMTP 通信を開始します。
2. アプライアンスは、SMTP サーバにクエリーを送信して受信者 `validuser@recipient.com` を検証する間、SMTP 通信を中断します。



(注) SMTP ルートまたは LDAP ルーティングクエリーが設定されている場合、SMTP サーバへのクエリーにはこれらのルートが使用されます。

3. SMTP サーバは、アプライアンスにクエリーの応答を返します。
4. アプライアンスは SMTP 通信を再開し、送信側の MTA に応答を送信し、SMTP サーバの応答（および SMTP コール Ahead プロファイルの設定）に基づいて接続を続行するかドロップします。

電子メールパイプラインでの処理の順序が決まっているため、特定の受信者宛てのメッセージが RAT によって拒否された場合、SMTP コール Ahead 受信者検証は発生しません。たとえば、RAT で `example.com` 宛てのメールのみを受け入れるように指定した場合、SMTP コール Ahead 受信者検証が発生する前に、`recipient@domain2.com` 宛てのメールは拒否されます。



- (注) HAT でディレクトリ ハーベスト攻撃防止 (DHAP) を設定した場合、SMTP コールアヘッドサーバの拒否は、指定した1時間あたりの最大無効受信者数の中の拒否数に含まれるので注意してください。SMTPサーバによって拒否が増える場合を考慮してこの数を調整する必要があります。DHAPの詳細については、「ゲートウェイでのメール受信の設定」を参照してください。

外部 SMTP サーバを使用した受信者の検証方法

	操作内容	詳細
ステップ 1	アプライアンスのSMTPサーバへの接続およびサーバの応答の解釈方法を決定します。	コールアヘッドサーバプロファイルの設定 (3 ページ)
ステップ 2	SMTPサーバが受信者を検証するようにパブリックリスナーを設定します。	リスナーでのSMTPサーバ経由の着信メール検証のイネーブル化 (7 ページ)
ステップ 3	(任意) メール別の別のホストにルーティングする際に使用するSMTPサーバを決定するには、LDAP ルーティングクエリを更新します。	LDAP ルーティングクエリの構成 (8 ページ)
ステップ 4	(任意) 特定の受信者に対してコールアヘッド検証をバイパスするようにアプライアンスを設定します	特定のユーザまたはグループのSMTPコールアヘッド検証のバイパス (9 ページ)

関連項目

- ・ [コールアヘッドサーバプロファイルの設定 \(3 ページ\)](#)

コールアヘッドサーバプロファイルの設定

SMTP コールアヘッドサーバプロファイルの設定では、アプライアンスとSMTPサーバの接続方法とSMTPサーバから返される応答の解釈方法を設定します。

手順

- ステップ 1** [ネットワーク (Network)]>[SMTPコールアヘッド (SMTP Call-Ahead)]をクリックします。
- ステップ 2** [プロファイルを追加 (Add Profile)]をクリックします。
- ステップ 3** プロファイルの設定値を入力します。詳細については、表「SMTP コールアヘッドサーバプロファイルの設定」を参照してください。

ステップ4 プロファイルの高度な設定を指定します。詳細については、表「SMTP コールアヘッドサーバプロファイルの詳細設定」を参照してください。

ステップ5 変更を送信し、保存します。

次のタスク

- [SMTP コールアヘッドサーバプロファイルの設定 \(4 ページ\)](#)
- [コールアヘッドサーバの応答 \(7 ページ\)](#)

SMTP コールアヘッドサーバプロファイルの設定

SMTP コールアヘッドサーバプロファイルの設定時に、アプライアンスと SMTP サーバの接続方法を設定する必要があります。

表 1: SMTP コールアヘッドサーバプロファイルの設定

設定	説明
プロファイル名 (Profile Name)	コールアヘッドサーバプロファイルの名前。

設定	説明
コールアヘッドサーバタイプ (Call-Ahead Server Type)	<p>コールアヘッドサーバへの接続方法を次から1つ選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [配信ホストを使用 (Use Delivery Host)]。SMTP コールアヘッドクエリーに配信電子メールアドレスのホストを使用するように指定する場合は、このオプションを選択します。たとえば、メールの受信アドレスが recipient@example.com の場合、SMTP クエリーは example.com に関連付けられた SMTP サーバに対して実行されます。SMTP ルートまたはLDAP ルーティングクエリーを設定した場合、クエリー先の SMTP サーバの決定には、これらのルートが使用されます。LDAP ルーティングクエリーの設定についての詳細は、LDAP ルーティングクエリーの構成 (8 ページ) を参照してください。 • [スタティックコールアヘッドサーバ (Static Call-Ahead Server)]。クエリー先のコールアヘッドサーバのスタティックリストを作成する場合は、このオプションを使用します。コールアヘッドサーバの名前や場所が頻繁に変わらないと思われる場合は、このオプションを使用できます。このオプションを使用すると、アプライアンスは、リストの最初のスタティックコールアヘッドサーバからラウンドロビン方式でホストにクエリーを送信します。 <p>(注) スタティックコールアヘッドサーバタイプを選択すると、クエリーにSMTP ルートは適用されないので注意してください。その代わりにMX ルックアップが実行され、その後、ホストでスタティックサーバのコールアヘッド IP アドレスを取得するためのルックアップが実行されます。</p>
スタティックコールアヘッドサーバ (Static Call-Ahead Servers)	<p>スタティックコールアヘッドサーバタイプを使用する場合は、このフィールドにホストとポートの組み合わせのリストを入力します。次の構文を使用して、サーバとポートのリストを作成します。</p> <p>ironport.com:25</p> <p>複数のエントリがある場合は、カンマで区切ります。</p>

次の表に、SMTP コールアヘッドサーバプロファイルの高度な設定を示します。

表 2: SMTP コールアヘッドサーバ プロファイルの高度な設定

設定	説明
インターフェイス (Interface)	SMTP サーバと SMTP 通信を開始するときに使用されるインターフェイス。 [管理インターフェイス (Management interface)] または [自動 (Auto)] のどちらを使用するかを選択します。[自動 (Auto)] を選択すると、アプライアンスは、使用するインターフェイスを自動的に検出しようとしています。Cisco IronPort インターフェイスは、次の方法で SMTP サーバとの接続を試みます。 <ul style="list-style-type: none"> • コールアヘッドサーバが設定済みインターフェイスの1つと同じサブネット上にある場合、接続は一致するインターフェイスによって開始されます。 • 設定済みの任意のSMTPルートが、クエリーのルートに使用されます。 • それ以外の場合、デフォルトゲートウェイと同じサブネット上にあるインターフェイスが使用されます。
MAIL FROMアドレス (MAIL FROM Address)	SMTP サーバとの SMTP 通信に使用される MAIL FROM: アドレス。
検証要求タイムアウト (Validation Request Timeout)	SMTP サーバからの結果を待機する秒数。このタイムアウト値は、複数のコールアヘッドサーバにアクセスする可能性のある1つの受信者検証要求に対する値です。 コールアヘッドサーバの応答 (7 ページ) を参照してください。
検証エラーのアクション (Validation Failure Action)	受信者検証要求が失敗した場合 (タイムアウト、サーバの障害、ネットワークの問題、または不明な応答により) に実行するアクション。アプライアンスでのさまざまな応答の処理方法を設定できます。 コールアヘッドサーバの応答 (7 ページ) を参照してください。
一時的なエラーのアクション (Temporary Failure Action)	受信者検証要求が一時的に失敗した場合 (リモート SMTP サーバから 4xx 応答が返された) に実行するアクション。メールボックスが一杯の場合、メールボックスを利用できない場合、またはサービスを利用できない場合に発生することがあります。 コールアヘッドサーバの応答 (7 ページ) を参照してください。
セッションあたりの最大受信者数 (Max. Recipients per Session)	1つの SMTP セッションで検証する最大受信者数。 1 ~ 25,000 セッションの間で指定します。

設定	説明
サーバあたりの最大接続数 (Max. Connections per Server)	1 台のコールアヘッド SMTP サーバへの最大接続数。 1 ~ 100 接続の間で指定します。
キャッシュ	SMTP 応答のキャッシュのサイズ。100 ~ 1,000,000 エントリの間で指定します。
キャッシュTTL (Cache TTL)	キャッシュ内でのエントリの存続可能時間値。このフィールドのデフォルト値は 900 秒です。60 ~ 86400 秒の間で指定します。

コールアヘッド サーバの応答

SMTP サーバからは、次の応答が返されます。

- **2xx** : コールアヘッドサーバから 2 で始まる SMTP コードを受け取った場合、受信者は受け入れられます。たとえば、応答が 250 の場合、メーリングアクションを続行できます。
- **4xx** : 4 で始まる SMTP コードは、SMTP 要求の処理中に一時的な障害が発生したことを示します。後で再試行すると正常に処理されることがあります。たとえば、応答 451 は、要求されたアクションが中止されたか、処理中にローカルエラーが発生したことを示します。
- **5xx** : 5 で始まる SMTP コードは、SMTP 要求の処理中に永続的な障害が発生したことを示します。たとえば、応答 550 は、要求されたアクションが実行されなかったか、メールボックスを使用できなかったことを示します。
- **タイムアウト**。コールアヘッドサーバから応答が戻されない場合、タイムアウトが発生する前に再試行する時間を設定できます。
- **接続エラー**。コールアヘッドサーバへの接続に失敗した場合、受信者アドレスへの接続を受け入れるか拒否するかを設定できます。
- **カスタム応答**。検証エラーおよび一時エラーのためにカスタム SMTP 応答（コードとテキスト）との接続を拒否するよう設定できます。

リスナーでの SMTP サーバ経由の着信メール検証のイネーブル化

SMTP コールアヘッドサーバプロファイルを作成したら、そのプロファイルをリスナーでイネーブルにして、リスナーが SMTP サーバ経由の着信メールを検証できるようにする必要があります。プライベートリスナーでは受信者の検証は必要ないので、SMTP コールアヘッド機能はパブリック リスナーでのみ使用できます。

手順

ステップ 1 [ネットワーク (Network)] > [リスナー (Listeners)] に移動します。

ステップ2 SMTP コールアヘッド機能をイネーブルにするリスナーの名前をクリックします。

ステップ3 [SMTPコールアヘッドプロファイル (SMTP Call Ahead Profile)] フィールドで、イネーブルにする SMTP コールアヘッドプロファイルを選択します。

ステップ4 変更を送信し、保存します。

LDAP ルーティング クエリの構成

LDAP ルーティング クエリーを使用して、メールを異なるメール ホストにルーティングする場合、AsyncOS は、代替メールホスト属性を使用して、クエリー先の SMTP サーバを決定します。ただし、この処理が不適切な場合があります。たとえば、次のスキーマでは、メールホスト属性 (mailHost) には、コールアヘッド SMTP サーバの属性 (callAhead) で指定されているサーバとは異なる SMTP アドレスがあります。

```
dn: mail=cisco.com, ou=domains
mail: cisco.com
mailHost: smtp.mydomain.com
policy: ASAV
callAhead: smtp2.mydomain.com,smtp3.mydomain.com:9025
```

この場合、[SMTPコールアヘッド (SMTP Call-Ahead)] フィールドを使用して、SMTP コールアヘッドクエリーを callAhead 属性で指定されているサーバに転送するルーティングクエリーを作成できます。たとえば、次の属性でルーティングクエリーを作成できます。

図 2: SMTP コールアヘッド用に設定された LDAP ルーティングクエリー

Routing Query	
Name:	LDAP1.routing
Query String:	{mail={d}} Test Query
Recipient Email to Rewrite the Envelope Recipient:	
Alternative Mailhost Attribute:	mailHost
SMTP Call-Ahead Server Attribute (optional):	callAhead <small>This attribute is used only if an SMTP Call-Ahead server is configured. Go to Network > SMTP Call-Ahead.</small>

このクエリーでは、{d} は受信者アドレスのドメイン部分を表し、SMTP コールアヘッドサーバ属性は、クエリーに使用するコールアヘッドサーバとポートの値として、ポート 9025 の smtp2.mydomain.com、smtp3.mydomain.com を返します。



(注) この例は、LDAP ルーティングクエリーを使用して SMTP コールアヘッドクエリーを正しい SMTP サーバに転送できるクエリーの設定例の 1 つです。この例で説明したクエリー文字列や特定の LDAP 属性を使用する必要はありません。

SMTP コールアヘッドクエリのルーティング

SMTP コールアヘッドクエリのルーティング時、AsyncOSは次の順序で情報をチェックします。

1. ドメイン名をチェックします。
2. LDAP ルーティングクエリーをチェックします。
3. SMTP ルートをチェックします。
4. DNS ルックアップを実行します (MX ルックアップ、A ルックアップの順に実行)。

ドメインに LDAP ルーティングクエリーまたは SMTP ルートが設定されていない場合、前の状態の結果は次のステージに渡されます。SMTP ルートが存在しない場合は、DNS ルックアップが実行されます。

SMTP コールアヘッドクエリーの代わりに LDAP ルーティングクエリーを使用するときに、SMTP ルートも設定されている場合、ルーティング動作は、ルーティングクエリーから返される値によって異なります。

- LDAP ルーティングクエリーからポートなしで1つのホスト名が返された場合、SMTP コールアヘッドクエリーはSMTP ルートを適用します。SMTP ルートがホスト名として宛先ホストだけ指定した場合、SMTP サーバの IP アドレスを取得するように、DNS ルックアップが実行されます。
- LDAP ルーティングクエリーからポートと共に1つのホスト名が返された場合、その SMTP ルートが使用されますが、SMTP ルートでポートが指定されていても、LDAP クエリーによって返されたポートが使用されます。SMTP ルートがホスト名として宛先ホストだけ指定した場合、SMTP サーバの IP アドレスを取得するように、DNS ルックアップが実行されます。
- LDAP ルーティングクエリーからポートと共に、またはポートなしで複数のホストが返された場合、SMTP ルートが適用されますが、SMTP ルートでポートが指定されていても、LDAP ルーティングクエリーによって返されたポートが使用されます。SMTP ルートがホスト名として宛先ホストだけ指定した場合、SMTP サーバの IP アドレスを取得するように、DNS ルックアップが実行されます。

特定のユーザまたはグループの SMTP コールアヘッド検証のバイパス

リスナーで SMTP コールアヘッド検証をイネーブルにしたまま、特定のユーザまたはユーザグループに対して SMTP コールアヘッド検証を省略する必要がある場合があります。

SMTP コールアヘッドクエリー中にメールを遅延させてはならない受信者に対する SMTP コールアヘッド検証を省略する場合があります。たとえば、有効であることが明確であり、迅速な対応を必要とするカスタマーサービスのエイリアスに RAT エントリを追加できます。

SMTP コールアヘッド検証のバイパスを GUI から設定するには、RAT エントリを追加または編集するときに [SMTP コールアヘッドをバイパス (Bypass SMTP Call-Ahead)] を選択します。

■ 特定のユーザまたはグループの SMTP コールアヘッド検証のバイパス

翻訳について

このドキュメントは、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。